青木 裕次
（元青森県立北斗高校校長）

『幽鳥弄真如』

山鳩やら雀が、拙宅の狭い庭に飛んで来て糞を落とし、金木犀や八つ手の葉を汚して行くので、1週間に一度くらいは、汚れた葉っぱを、仕方が無いなと思いながら水拭きしています。また、春になると金木犀は、枯葉を沢山落とします。冬に茂っていた葉が、その役目を終えて新しい葉と交代。春先から初夏にかけて我が家の庭は、掃いても掃いても、金木犀の枯葉が散乱するのです。庭に自然に生える無用な草は小まめに抜きますが、その反面、この草々にも生えることの意味があると感じるのです。猫額の小さな庭ですが、無心に庭仕事をしていると、草木や鳥が私の心に、色々なことを語りかけてくれる気がします。そして、心を無にしてひたすら行う庭仕事に、私は僧侶の作務に通じるものを感じるのです。

禅語に「古松談般若　幽鳥弄真如（こしょうは　はんにゃを　だんじ　ゆうちょうは　しんにょをろうする）」という言葉があります。古い松は黙して語らず、ただただ無為に年輪を刻んでいるように、人は思うかも知れません。一方、幽鳥は遊鳥に通じ、ただ意味も無く遊び回っているように見えるでしょうが、『その松の緑や苔生した幹の姿、鳥の鳴き声や羽ばたきの音、それらの全てに宇宙万物に通じる意味が込められている。だから松も鳥をも包括する森羅万象に常日頃から心せよ。そこに般若があり真如がある』そのような意味がこの言葉にあるように私は思います。そして、この世の中に存在するもの全てには、真実に通じる何らかの意味がある。自然の営みを侮ることがないように心せよ。そう教えてくれているようにも感じるのです。そして顧みるに、自然の一端である人間、つまり私達一人一人が此処に存在することにも、深いものがあると今更のように思うのです。

「人間を救うのは、人間だ」これは、日本赤十字社が提唱している言葉です。その通りです。しかし、この言葉の裏側には「人を苦しめるのも人だ」ということも含んでいるのではないでしょうか。だからこそ、この言葉には、人が人を苦しめることがないように生きていこうという祈りも籠められていると思うのです。赤十字の原則の第一に挙げられるのは「人道」です。「人道」とは、人々の命と健康を守り、人の心身の苦しみを予防・軽減し、人間としての尊厳を確保することです。ウクライナやスーダン等々で起きていることが注目され、近頃盛んに「人道危機」が叫ばれるようになりました。人間の四つの弱点である「利己心」「無関心」「想像力の欠如」「認識不足」が「人道」の障害になっていると言われています。そして、この四つのことこそが、人が人を苦しめる源になっていると言われます。私は、傍から見ると一風変わって見えるようです。自分としては、ごく普通ごく当たり前なのですが、今考えれば、その為にいわれなく嫌われたり疎外されたりしたようなことがあったようです。余り他人の感想や評価・誹りに頓着しない質なので、今頃になって、そうだったのかも知れないと思い出すのですが、反面、自分の来し方を考えてみるに、己にも他者を良く理解しようともせずに、毛嫌いしていたこともあったと思い当たるのです。自然災害等で人が傷付けられる事がありますが、それにも増して、人をもっと深く傷付けるのは人間です。しかし、人を励まし、慰め、手助けをして、どん底から救ってくれるのもまた、人間なのです。自然の全てに意味がある様に、国を越え民族を越え、思想を越え、宗教を越え、人種を越え、年齢を越え、男女を越えた全ての人々に、生きる意味があることを「古松談般若　幽鳥弄真如」の言葉が、今に伝えているのではないかと思うのです。

バックナンバーは本会ホームページでも掲載しておりますので、ぜひご覧ください。